
介入者はモブばかり

めだかクロニクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

介入者はモブばかり

【Nコード】

N5342Z

【作者名】

めだかクロニクル

【あらすじ】

俺は気がつくくとダドリーになっていた。そう、全ては終わった。そんな、ギャグ作品です。

作品を完全崩壊させているので注意して下さい。
見切り発車です。

始まりは突然に絶望を与える

真っ暗だった。どこもかしこも暗くて、何も見えなかった。

俺はいつたいたいどこにいる。暗いな、何も見えやしない。

……目覚めよ……目覚めよ……

ああ、俺寝てたんだ。

そう思って、目を覚ますと、体が縮んでいた。

俺は黒の組織を倒す為に、戦うのだ。戦う為に博士に作ってもらった時計方麻酔銃とキック力増強シューズでやつらを踏み潰してくるわ。

ぐふふな事を考えていると俺の口に何かが流し込まれた。それに現実へと引き戻された。

「ダドちゃん、たくさん食べましょうね」

誰がダドちゃんだよ。そう思いながら、口を開けてドロドロの食物を食べた。どうやら、俺は、赤ん坊になっていたようだ。最初は巨人の島にでも連れてこられたかと思ったが、どうも違っていったようだ。

離乳食のおいしさに舌鼓みを打ちながら、状況を分析してみた。

まず、目の前にいる人たちを俺は知らない。

俺は、見知らぬ二人の人間を見た。どうしてか、せつせと食事を口

に入れてくるが、知った顔ではなかった。むしろ、日本人である俺に、外国の人がなぜ親切なのか分からない。

そして、俺は自分の体を見た。やはり、先ほど確認したとおりの赤ん坊である。しかし、その体は通常の赤ん坊よりも2まわりくらい大きいと思われる。つまり、デ・・ぽっちゃん系である。

ここから、推察するに、どうしてだか、俺はこの人たちの子どもになっってしまったのだろうか。これは、いわゆる憑依というものだろう。

ここで、一つの問題が出てくる。ここがどこなのか。そしてどの世界なのかだ。

ここが現実なのだとしたら、まだ許容範囲だ。しかし、もしも漫画の世界だとすれば、大問題だ。忍者の世界やゴンさんの世界はやめてほしい。とてつもなく、死亡フラグ満載だ。

おそらく、この家の感じからして、現代である事は間違いない。だからといって油断はできない。死神の世界、あるいはめだかの世界などといった、現代の話もある。ここで、この世界のヒントになるものを探そうと思う。俺の戦いはそこから始まるのだ。

その日の夜、家の前に赤ん坊が置かれた。そう、俺に弟ができたのだ。その子を恐れるように現両親が俺を抱きかかえながら、震えていた。なんとか、その子の顔をうかがうと、どこかで見ただった。その子の名前はハリー・ポッターというらしい。そして、全てを理解した。

俺はダーダドリー・ダースリーだったのだ。

始まりは突然に絶望を与える（後書き）

ホグワーツルート消滅。

断じて違つー！

「ハリー、遊ぼう」

「うん」

俺があまりにも、ハリーを凝視している事に小首をかしげたハリーが口を開いた。

「ダド、鼻から血が出てるよ」

「心配するな。愛のなせる奇跡さ」

そう、俺達はとても仲が良いのだ。当たり前的事だが、俺はそこらの餓鬼ではない。前の俺は、高校2年で大学に飛び入学したのだ。日本じゃなければ飛び級して15歳で大学に入学する事ができた。どうして、俺が日本にこだわっていたのか、それは、俺がオタクだったからだ。アメコミもたしかに面白いが、日本独特なオタク文化をこよなく愛していた。

話が飛んだが、そんな俺が親の言いなりになるようなわけがないしこんな可愛いハリーをほっとけるわけがない。そう、俺は腐っている。だが、手を出す気はない。ハリオにはジニーちゃんという将来の豚がいるのだ。俺の弟を取ろうとはやってくれるぜ泥棒猫が。

俺の弟の溺愛振りがこうをそうしたのか現両親もずいぶんハリオに優しくなった。今は、ハリオのめんどろを見るために、一緒の部屋で寝ているが、将来は、ハリオにも部屋が与えられるだろう。

ハリオのめんどろを見る中には、ハリオの魔力の暴走を抑える役も僕にしかできないだろう。どうしてかわからないが、夜中にハリオが悪夢にうなされて魔力を暴走させた時、俺は壁に叩きつけられた。俺が壁側で寝ていたため、逃げ場がなく、何とかハリーに近づき、顔に触れると魔力が弱まった。顔中触っているとどうやら、眉間のしわと、旋毛のあたりを押すと暴走はおさまるようだ。そんなこんなで、ハリオも俺の事が好きになっている。

ハリオは間違いなくホグワーツルトに行くだろう。しかし、俺はおそらくいけない。だってポテンシャルはダドリーだ。無理である。ハリオの成長を見守れないのは嫌だが、メス豚どもに会わないのは嬉しい。会ってしまえば、JKもビツクリの嫌がらせをしまくり、ハリオに嫌われてしまう。それだけは阻止しなければならぬ。

「ダド、どうしたの？いこー」

俺の考え込んだ様子を不安げに見詰めながらハリーが言った。

「ああ、行こうかハリー。俺より早く公園についたら、アメちゃんやるよ」

「僕勝つよ」

結果を言えば、負けました。

最初からハリオに勝たせるつもりだったけど、ちょっと焦らせてやるうと思っただけで走って見たら、ハリオは焦った顔をしてぎゅつと目をつむった。その瞬間、ハリオは姿を消し、何と公園にいたの

だ。姿あらわしかよ。偶然できたんだろっけど、卑怯な力だな。

断じて違う！！（後書き）

断じてBLではありません。

感動の涙必至、ハリオとの再開（前書き）

アメリカドラマのネタバレがある回なので要注意です。

感動の涙必至、ハリオとの再開

2年がたとうとしていた。

え？キンクリ？聞こえない。聞こえない。

大学でのハッピーライフは中間地点を迎えた。

俺の学生生活は主に図書館ですごした。イエールの蔵書量は尋常ではない。この本を全て読みつくすのは、至難の業だろう。無理だといわれれば、やってみたくなるのが人間だと思う。日夜挑戦中だ。そんな、本の虫な俺は学校の教授陣に重宝されている。記憶力を生かし、カンファレンスもビックリの早業で、本を探し出し、指定された文章が何ページに載っているか教えるのだ。カンファレンスのババアは、仕事を奪われて俺の事を嫌っている。図書館に行くと、よく後をつけられ、どの本を見ているのか探られているようだが、やつの見ている前では、自分でも読めない言語の本をとるようにしている。それをさも理解しているように頷きながら見るのが俺の日課だ。

教授陣は俺に会うたびに、ダドペディア（自分で名乗った）と呼び、本検索をさせられる。それは、あんたの仕事だろというのと、大抵アイスのクーポン券をくれる。釣られてしまう俺が悪いのだが、これは明らかにJKの痩せるなという修正力を感じる。だいたい、日本でJKなんていったら爆笑だろ。ババアのくせに。でもちょっと本物のJKがローリングしてるところ見たい、むしろ一緒にローリングしたい。そんなことを考えていると頭に思い一撃がきた。

「痛っ、何するんだ、ダン」

「お前がまたエロイ顔してしてたから、また変態な事でも考えているのかと思ってさ」

こいつの名は、ダンという。才能もないくせに将来小説家になりたいという無謀野郎だ。

何かにつけて、俺に絡んでくるウザ男である。こいつは、自分の人生を小説にする自伝かいてるくせに小説だと言い張る中二病を発病していて、人生自体が現実は小説より奇なりというのを体現したようだ。簡単に言えば、恋した相手がロイヤルファミリー並みの金持ちで、恋仲で進んでいたら、実はこいつの親父と相手の母親が昔に付き合っていたことが発覚して、すったもんだのすえ、恋愛関係が義理のきょうだいになってしまった。

最初のうちはリア充爆発しろと思っていたのだが、義理のきょうだいという事を聞いて少し同情した。どちらにしても金持ちである事には変わらないがな。ちなみにダンの義理の弟はガチの同性愛らしい。さすがにネタにできないが、写真を見せてもらったときはショタっ子すぎてちょっと引いた。うちのハリオは成長と共にいかつくなっていくというのにな。

「お前の7面相はいつもの事だが、涙まで流すとはどうしたんだ？」
心の嘆きが漏れてしまっていたらしい。

「それで、お前なんのようだよ」

「お前がこの前くれた携帯ゲームを家族がほしがってるんだよ。まだ、あるか？」

「何だたかりかよ。まああるにはあるけど」

「それは良かった。お礼がしたいから、今度家に来いよ」

「いやだよ。お前の家、何か怖いもん」

「家族も会いたがってんだよ」

「上流階級なんかに会いたくないよ」

「美味しいアイスがあるんだけどなー、パティシエ呼んで作らせるって言ってたのにな」

「行きます、行きます。行かさせてください」

「おう、じゃあ、また連絡するな」

そうして、ダンと別れ、俺は自分の部屋に向かった。

部屋に戻ると、俺はいつもの儀式をする。

まず壁にかけられている、ハリオのポスターに一礼する。ちなみにこの部屋に入るやつには、皆にそれをやらせている。

そして、俺はハリオの秘蔵写真集アルバムをめくり一通り見ると合掌をして閉じる。

これが、俺の朝起きてからと家に帰ってきてからそして寝る前の習慣だ。

この行為をダンに変態だといったが、失礼なやつだ。唯のブラコンだ、日本じゃ当たり前だといっておいた。その証拠にいくつかの文献を見せておいた。いわゆる同人誌というやつだ。ダンは、アメリカでは控える、捕まるぞと言われた。司法に俺の愛が止められると思っっているのか、まったく馬鹿なやつだ。

そんな事を思いながら、俺は作業に取り掛かった、俺が今作っているのはたまごゲームを改良した、モンスターゲームだ。このくらの物だつたら、なんなく作れる。趣味程度に作っているのだから、問題はないだろう。未来知識は大いに活用させてもらっている。小説もそのひとつだ。ちょっと罪悪感に駆られるが、俺はハリオのために頑張るのだ。俺はマグルだから、魔法界には関われない。だからこそ、マグルである俺が社会的地位に着くことで、魔法界と人間界の橋渡しをし、ハリオ帝国を築くのだ。ヴォルの野郎はどうせハリオが倒してくれるから問題ない。

原作というのは異分子が関わるからずれるのだ。しかし、俺は、ダドリーだ。関われるはずがない。それに、ハリオは今ホグワーツの一年生だが時々手紙をよこしてくるが、原作に乱れはない。俺に手紙で聞いてきた内容が、ニコラスフラメルって知ってるか聞いてきた。いちよう、大学図書館で探した。それを見つけてレポートを書いて送っておいた。ついでに、ライターと懐中電灯（太陽光にもっとも近いと言われる）を送っておいた。悪魔の畏も真っ青だぜ。

ただ、その後、何となく気になって調べてみたら、魔法界にしかあ

りえない情報が載った本まで見つけてしまった。俺が貴重書の棚を見ていたら、上級魔法薬とかかれた本や最も強力な魔法薬、あなたはマグル関係の仕事を考えていますね？等といった明らかに魔法界の本があったのだ。イエール図書館工。

興味がわいて教授に頼み、イエール図書館の書庫の閲覧許可をもらい調べてみると、深い闇の秘術とかかれた本があった。俺は、それを見なかったことにした。唯一つ、確信したことがある。それは、同じく書庫で見つけた本の中に、マグルの中で働く方法イエール板と書かれている本があった。イエールにも紛れ込んでいるようだ。うん、無視無視、俺には関係ないさ。俺の魔法使いはハリオだけだ。そんなハリオとももうじき再開を果たす。

そう、ハリオが一年生を終えるのだ。俺は今、9と3 / 4に猛烈にドッキドッキなのだ。

ハリオ再開の前日

「ね、ね、寝過ぎしたー」

俺は寝巻きのままで飛び出した。

走りながら歯を磨き、そこらにいた知り合いから水をぶん取ると、うがいし、木に水をやっておいた。

「どけ！貴様ら、明日までにイギリスに行かなくてはいけないんだ」
ダドペディアのお通りだとなると、学生達は素直に道を空けた。子ども相手に喧嘩するやつもないし、何より事典として扱うために

機嫌を損ねさせたくないというのが本音だろう。
道まで全力疾走して、タクシーを拾おうとするのだが、なかなか止まってくれない。道に罵声を浴びせしていると、一台の車が目の前に止まった。

「乗れ」

俺は、ハリオに会いたい一心で、その車に乗った。

「どこに向かっているんだ」

「イギリス」

「そうか、わかった。空港に向かえ」

男は、運転手に指示を出すと、こちらに向き直った。

「お前、ダドリーだろ」

「ハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオ」

「そうか、身内に何かあったか」

男は、何か考えた素振りを見せ、言った。

「安心しろ、俺が最速で届けてやるよ」

親切な人にイギリスまで届けてもらった。

なんと、服まで着替えさせられていた。いやー！俺の貞操がー！！ハリオだけのものだったのにー！！！！

名前を聞くのを忘れてしまっただけで御礼（文句）もいえないが、心の中で感謝しておこう。

現両親と再会しハグをしてから、キングクロスに向かった。俺は、ついたやいなや真つ先に9番線と10番線のホームに向かった。ここか、そう思い、俺は柱に突っ込んだ。グシャツという大きな音と共に、その場に崩れ落ちた。

「俺の邪魔をしようとは良い度胸じゃねえか」

怒りに満ち溢れた俺は、渾身の力で壁を蹴った。何度も何度も蹴っている。突然人が壁から現れた。蹴りを止めるまもなく思いつき蹴りを放ってしまって、大丈夫か確認するまもなく、壁の中に消えた。しばらくして、恐怖に引きつった顔と怒りの表情で出てきた人が俺をガン見した。

「すみません。入れなかったもので」

「き、気をつけたまえ」

こめかみを引くつかせながら男は言った。男に連れられた少年があ

まりにも可哀想だったので、ハリオに渡す予定だった飴の一部を渡しておいた。

「こ、こんなんもの」

「捨てるの？」

捨てようと、地面に叩きつけようとした少年に俺はすかさず言った。少年はビクリと揺れた。

「美味しいから食べなよ」

少年は震えながら、飴を口に入れた。ハツとしたように顔を上げた。どうやら美味しかったようだ。まあまあツンデレではないか。デコだが。

「少年よ大志を抱け」

少年たちが去っていく背中に向け大声で言うておいた。

「ダド、何してるの？っていうか」

懐かしき美声を聞き振り返るとそこにハリオがいた。

「ハリー会いたかったぜ」

俺はハリオの前ではクールを気取っているのだから体はハリオに抱きつかうとしたが、強靭な意志の力で押さえつけた。すると、ハリオのほうからハグをしてきた。

(やべ、鼻血でそう)

俺は、優しくハリーの背中に手を回した。

「ハリー、そのデブ誰？」

ハリオの後ろから声をかけてきた赤毛の少年が言った。

「誰がデブだ。これはJKの呪だ！魔法使いだったら呪を解け！！
それと俺はぼっちゃり系だ」

引いた顔をする赤毛にハリオがやさしく語りかけた。

「ロン、紹介するよダドだよ」

「ああ、靴下の」

靴下という言葉を聴き俺は反応した。

「ハリー、クリスマスプレゼントすごく嬉しかったよ。ハリーの靴下をくれるなんて、自分の足も気にせず悪かったな」

「ダドには、僕の方があったほうが良いかと思ってね。ダドのプレゼントのカシミアのマフラー、凄く暖かったよ」

後ろからロンが声を上げた。

「そつだ、僕ももらったんだ。ありがとう」

「ハリーがお世話になっているからね」

俺は、ハリオの友達にも送っておいたのだ。せいぜいハリオ帝国の礎となるがいい。

「ダド、でもやりすぎだよ。グリフィンドール生全員にプレゼント贈るなんて。マクゴナガル先生や校長先生にも贈ったんだって、それにスネイプにも」

「御世話になつてるんだから当たり前さ。スネイプ先生にもお世話になつたんだろう」

「ダド、何か知ってるの?」

「ハリーが手紙で教えてくれたろ。厳しくあたるって事は、それだけ目をかけられているということだろう?」

「そういうことか」

もちろん、俺は、全てを知っているんで、スネイプにもプレゼントを贈っておいた。ついでに、クイレルにもありとあらゆる魔除けを送っておいた。ふふふ。

「ダド、また7面相してるよ」

「ああ、すまなかったな。あれ、ロン君はどこかな」

「もう帰っちゃったよ」

「そうか、では俺達も帰ろうか」

そう言って、家に帰っていった。

感動の涙必至、ハリオとの再開（後書き）

ダンとか分かる人いるんですかね。

眠いーよ。深夜のテンションがハンパないです。

ウィキペディアがこの時代には存在しないと云つツツコミは無いの方向でお願いします。

やべ、俺ロイヤルファミリーになっちゃった(前書き)

時系列は秘密の部屋です。

注意、髭の配管工とバイオな災害の話、卵型ゲーム、電子モンスター
ーのゲームのファンの方はご注意ください。

やべ、俺ロイヤルファミリーになっちゃった

「僕、ロンの家に行くんだ」

俺は、俺の事をつついて邪魔をしてくるヘドウィグとの戦いを止めた。俺は絶望したハリーが行ってしまおう。俺を捨てて、行ってしまおうんだ。あのロナルド・ウィーズリーのもとへ。

「学校に行く前にね、少しかだけロンの家に行く事になってるんだ。今日手紙が来て日にちが決まった」

俺はハツとした。そうだ、これは秘密の部屋の話しだと思ったのだ。そして、思わずヘドウィグを投げ飛ばした。

「ハリーが家出するのかと思ったよ」

「そんなわけないよ」

「では、バームクーヘンでも買っておくから持っていくといい」

「良いよ、そんなの」

「駄目だよ。それが礼儀というものだ。礼儀を欠けばキレられるぞ」

その前に、イベントがあるがと思った。実のところ、俺はそのイベ

ントまではいれない。

大学からの要請で行かなければならないのだ。始めは、ハリオとの時間の邪魔だと断ったが、あれよこれよどうしても断れなくなっていた。おそらく、修正力だろう。俺がハリオといれば、閉じ込めるなんてことをしないので、必然的に空飛ぶ車イベントが消滅する。そうすると、最終的にハリオはアラゴグの餌食になってしまう。それは、困るのでしかたなく大学に出頭する事になった。

「ダドはもうすぐ行っちゃうんだよね」

「悪いな、俺も断れなくてさ」

「ダドにはホグワーツのことたくさん話したかったのにな」

「俺が行くまでに、たくさん聞かせてくれよ」

「そういえば、どうしてニコラス・フラメルのことを知っていたの？」

「マグルの世界でも有名な人だからね」

「そうなんだ。マグルの話だから、僕達とは関係ないと思ってた」

「うん？じゃあ、あの情報は役に立たなかったのか？」

「えっとね、ハーマイオーニーがマグルの情報だから必要ないって言うてさ」

「見てないのか・・・」

「う、ごめん。でも、事件が終わってから読み返したら、すごく役に立つ情報だったねってハーマイオーニーが絶賛してたよ」

修正力か、そう思いながら返答を返した。

「それは、光栄だね」

「ハーマイオーニーが、ダドと話してみたいって言うてたよ」

「いずれ、機械があればね」

にこりと笑って返答を返した。

そうして、毎日のハリオとの楽しい日々も終わりを向かえ、俺は大学に帰還した。

教授に呼び出されて、教授の部屋の扉の前でノックして入った。

「ああ、きたか」

この教授の名前は、アルバート・レスターという、俺を事典代わりに使う筆頭なのだ。教授の用事がなんだろうと思いついてみると、娘に彼氏ができて会いに来るそうで一人じゃ心細いだとか。

「あんた、緊急の要件で、俺がいなけりゃあんたの人生が終わるって言ってたじゃないか」

「何言ってるんだ、俺の人生の一大事だろ」

「もう、帰ります。そっごく飛行機に乗ってイギリスへ」

「頼むよ、いてくれよ。今度、好きなものおごるから」

「・・・寿司でいいですか」

「ガキの癖に生意気な」

「帰ります」

「わかった。わかったから、いってくれよ」

「はあ。娘さんいくつですか？」

「14歳だ」

「教授ともあろうつひとが、何をそんなにビビってるんですか」

「だってローティーンの話なんてわかんないし。ダドリーと年齢近いからいたら少しは楽になって思ってる」

「ダメオですね」

「・・・子ども怖いんだよ。何考えてるかわからない」

俺はため息をつきながら、了承した。今帰っても修正力で帰れなくさせられるんだから。JKの力で飛行機を落とされたらたまったもんじゃない。

そうして、俺の早い学校生活は幕を開けた。

「あれ？ダドリーこんなところで何してるの？」

俺が喫茶店でパフェを食べている邪魔をする声があった。声をかけてきたのはダンだった。

「パフェ食ってんの」

「お前って、こうしてみると本当に子どもだな」

「失礼な。なんだと思ってたんだ」

「いやー喋っていると、時々、同世代かと感じさせられるからさ」

「んなわけないだろ。お前らみたいな髭男爵と一緒にするなよ」

「髭男爵って、それより、食事会の日が決まったぞ」

「は？」

そう言いながら、俺はアイスをほおばった。

「話しただろ、俺の家族が会いたがってるって」

「ああ、そうだったな。んで、いつ？」

「3週間後の予定だったけど、お前今日は暇なの？」

「まあ、得にする事ないし」

「ちょうどいい、じゃあ今日今から俺ん家来いよ」

「え？」

「ちょうど家族揃ってるしさ、早い方がいいだろ」

「いやだって、パティシエ呼ぶんだろ？予約みたいなものあるだろ」

「あー、多分大丈夫だ」

「意味わからない。まあ別に予定ないからいいけど」

そうして、俺は食事会に招待された。

豪華すぎる食事だった。アイスも大変おいしゅうございました。まあ、なんていうか、家族だけじゃなかった。なんか昔から付き合っている、親友みたいなものもいた。全員、ロイヤルフアミリーだったし美男美女ばかりだった。何かむかついた。

その中の一人は、なぜか、親しげに声をかけてきた。どうやら俺をイギリスまで送ってくれた人だったようだ。身内は無事だったかと聞かれ、意味がわからなかったが元気ですと答えると、意味ありげに、そうかと言っていた。

その後は、俺が作ったモンスターのゲームを渡すと、楽しそうに遊んでいた。男の子はやはりモンスターが良いらしい。

そして、どうしてか、たまごとモンスターのミニゲームを売り出す事になってしまった。バ　ダイさんごめんなさい。でも、赤字でなかったから良いでしょと無理やり納得しておいた。

その後の販売戦略は見事だった。ダンのきょうだい結構有名な人らしく、ゴシップ誌に出るときにゲームを見せびらかした。あつという間に流行の最先端になった。大量生産はせず、どのくらい流行るかみこして生産したほうが良いと忠告しておいた。その方が値は釣りあがると殺し文句をつけると、お前とは気が合いそうだと言われた。

俺は小説案件ゲームの発明家になっていった。そうして俺はフリーのアイディアマンとなった。カ　コンから依頼が来た時は、生物災害のゲームを出せと言っておいた。任天堂から依頼が来た時は、髭の水道工がカーレースをする話を提案しておいた。当たるのは確実

だ。

そんなこんなで、また一年がすぎた。ハリオへのクリスマスプレゼントはもちろんだまごとモンスターのゲームを渡した。とつても喜んでお返しにハリーが使い込んだ手袋をくれた。

そういえば、ハリオはホグワーツが怖いといって手紙をよこしてきた事があった。秘密の部屋イベントが起きているのだなと思い、眼鏡はずっと掛けているとっておいた。ついでに、ハリーの学校つてトイレとか水道の水つてどうやって流れてるのと聞いておいた。ふふふ、ナイスアシストだ俺。ちなみに近況報告で莫大な金をもらったと報告しておいた。

そうしたら、白紙の紙が送られてきた。きっとハリオはおっちょこちよいだから、手紙を書き忘れたんだなと思った。可愛いやつめ。

お礼を言いたくてしょうがない、今か今かと俺はキングクロスでハリオを待った。去年の二の足は踏まない為、柱から少し離れていた。

「あつダド！」

ハリオと一緒に赤毛と縮れ毛が出てきた。俺は、会ってなくても人の名前がわかるので特だ。後ろに赤毛の女子がいなければもつと気分が良いが。

「え？この人がハリーの兄弟？」

縮れ毛が騒いだ。

「はじめまして、お嬢さん。ダドリー・ダズリーだ。今年は大変だったそうだね。元気な姿が見れて良かったよ」

ハーマイオーニーは口をパクパクさせていた。

「あ、あのダドリー・ダーズリーですって！！ハリーあなた何も教えてくれなかったじゃない」

「え？何のこと？ダドの事は一年生の時から君には言ってあつたはずだけど」

「だって、ダドリー・ダーズリーだなんて言わなかったじゃないの。10歳で大学に進学した天才児にしてベストセラーを次々出す小説家」

「大学ってなんだ？」

ロンが聞いた。

「大学って言うのは、魔法族には説明が難しいわね。簡単に言うなら、0歳でホグワーツに入学するようなものよ」

「0歳って喋れないじゃないか」

「もう！じゃあ、ホグワーツを一年生で卒業して魔法省で仕事するようなものよ」

「そいつは凄いや!!」

「ダドってそんなに有名人だったの？」

不思議そうにハリオが聞いてきた。

「うーん、どうだろう。珍しい事は確かだね」

「ふーん」

「ハリオだって有名だろ？」

「僕が？そんなことないよ」

さすがハリオだ。謙遜を心得ている。

「あの、今度おファンレターを送っても良いですか？」

ハーマイオーニーが聞いてきた。

「敬語はいらないよ。ぜひ送ってきて。そうだ、君に本をあげるよ」

そう言って、カバンから本を出し渡した。

「まだ、未発売の本だから内緒だよ」

ハーマイオーニーは目を輝かせて喜んでた。子どもは無邪気でいいなと思っていると、恐らくロンの父親であるアーサー・ウィーブリーが話しかけてきた。

「今度、私にもマグルの事を教えてほしいね」

「ええ、良いですよ。いつでも聞いて下さい」

そうして、別れ、俺達は、家に帰った。

家に帰ると、ハリオのお帰りパーティーをした。両親も子ども達も二人ともいなくなるので帰ってきてとても嬉しそうだった。

やべ、俺ロイヤルファミリーになっちゃった(後書き)

今回の話に出てきたゲームに思い入れのあるかた、申し訳ありません。

次回、俺は気づいていなかった。この世界がハリポッターの世界でない事に・・・なお話。

ハリー・ポッター・・・じゃないだと！（前書き）

ハリーポッター崩壊です。嫌な人は読まないでください。

ハリー・ポッター・・・じゃないだと！

俺が、花に水遣りをしながら、横にいるハリーオを舐めまわすように見ていた。ハリーオは何故だか震えながら綺麗な花を力強く抜いていた。おいおいハリーオ天然も良いが、綺麗な花を抜いたら可哀想だろ。おっちょこちょいな可愛いやつめ。

俺は、ハリーオを傷つけまいと別の事に注意が向くように話を振った。

「ハリーはずいぶん背が伸びたね」

「ダドはまた、体が大きくなったね」

俺は無言でハリーに水を掛けた。

「ちょっと、何するんだよ」

どうしてだか、ハリーオはズボンのポケットに手を突っ込んだ。

「ああ、手が滑った」

そういうと、ハリーオは俺からホースを取り上げようとした。だが、あきらかに俺のが力が強いので一生懸命引っ張っている。

「僕もダドに水掛けたい」

「嫌だよ」

「ダドとお揃いが良いのにな」

そういつて落ち込んでしまった。俺はしかたなくハリオにホースを渡した。ハリオは俺に水を掛けた。

「これで一緒だね」

「そ、そうだね」

そうこうしていると、ペチユニアが窓から声をかけてきた。

「何してるの！風邪を引くからお風呂に入りなさい」

俺達は二人揃ってはいっと声を上げ、風呂に行った。

二人で湯船に入っていると、ハリオが言った。

「僕って本当に大きくなってるんだね」

「ゲフン、ゲフン、な、何が」

「だってこの前まで、よく一緒にお風呂に入ってたのに、今じゃ狭く感じるから。」

「そ、そうだね」

「一緒にお風呂に入るのもこれが最後かもね」

「心配するな、風呂をでかくすれば良いのさ。すべては金だよ」

ハリオはなぜだかため息をついていた。

心配するな、俺はハリオの為に湯水のように金を使うために頑張ったんだ。

夜、みんなが寝静まったのを確認すると俺はキッチンへ行った。

キッチンで夜の残りのビーフシチューを皿に盛り、パンを手にして、玄關を出た。

そうして、茂みの中に向かうと小声で言った。

「あ、こんなところに美味しそうなシチューがあるぞ」

そう言っつて、俺は、その場を後にした。

しばらくして、出てきた黒い大きな犬がご飯を食べる姿にニヤリとした。

その日から、朝はパンとベーコンをラップで包み、それと水筒に入れた牛乳を茂みに向かって思いっきり投げた。水筒は後で玄關の前に置いとけよと叫んでおいた。ハリオには、不思議がられたが最近俺が開発中の頭のよくなる方法だと言っつておいた。次の日の朝ハリオが同じ事をしていて、少し心配になった。

風船おばさんイベントが起きた。案の定ハリオは家を飛び出していった。

その日は、庭にステーキを放置した。

せいぜい、ハリオの為に地べた這いずりまわるが良い。俺のハリオをかどわかしたら唯じゃおかないからな。

俺は、気ままに犬にえさをやったりしていながら、新学期の始まりを迎えた。

学校は最高学年を向かえ進路の事を考えなくてはならなくなった。

大学院に進む道もあったが、正直に言っただ俺はもう充分なほど金を持っていて、大学図書館の本も八割読んだ。勉強意欲もあるにはあるが、ハリオのために勉強していたのだ。それに見合う価値はない。

ただ、大学の教授達はダドペディアがいなくなると困ると俺を引き止めた。

そんな事を考えていた時、ある教授からインターンで大統領のオフィスでお手伝いをする話が来たので受けた。俺は、成功者であるし小説家としても地位を築いている。そして、子どもという事でクリーンなイメージがある。顔としてはもってこいのようなのだ。俺の迷惑はハリオ帝国の為だがな。

未来知識はおおいに役立つから、大きな事件は微妙なニュアンスで伝えて防がせるようにしておいた。

そして、どうやらここにも魔法界のものがいるようだ。ある部屋の中からポンつという音がするとさっきまで人がいなかった部屋から人が出てくるのだ。監視体制大丈夫なのかと心配になる。

俺はといえば、基本的に書類仕事というよりは、大統領の演説文章のお手伝いをさせてもらっている。俺の記憶力を用いながらここでもダドペディア扱いをされる。大人は汚いなと思ってしまう。

そんな事をしているせいか、俺はSPをつけられた。

この人が死ぬほどすごい。すぐに、電話をかけたなり、音がすると伏せると叫ぶのだ。すぐに銃を出すから危ないなと思っていいたら、案の定事は起こった。

俺がアイスを買に行き、並んでいると小さな子が親に連れられ風船を持って歩いてきた。そんな時、子どもが石につまずいて転んでしまい、持っていた風船が地面と子どもの間に挟まれパンツと音をたてて割れたのだ。その音を聞いたSPが銃を出したのだ、その場は叫び声におおわれ銃を向けられた女の子は泣き出すといった戦々恐々の事態に陥った。俺は急いでこの人は警察官でビックリしちゃったんだよと子どもに説明した。

俺はアイスも買わず帰宅し、アイスも買えなかったじゃないかと怒った。

「本当に・・・すまなかったと思っている」

間の長い謝罪の言葉を述べてきた。

銃はめつたに出すなといったら、それはできないらしい。俺には自衛能力がないから自分がいち早く危険を察知しなければいけないのだとか。そんなに危ないのかと聞けば、SPは自分の娘はしょっちゅう誘拐されるだの奥さんは殺された、仲間も何人も死んだとか。話を聞くうちに思ったのは、こいつ死亡フラグ製造マシンなんじゃないか。こいつの側にいるやつは皆死ぬと中二的な事をほざいていたが、本当っぽいから引かざるをえなかった。

SPを変えてほしいと大統領に頼んだが、駄目だと言われた。SPの事を調べてみると、優秀には優秀だが周りの話を聞かない厄介なものらしい。ようは俺に押し付けたということだ。ただひとつ気になることが出た。このSPの護衛対象は必ず死ぬということだ。俺を殺したいのかと悪意を感じる。

そこで、解決策として俺はSPに自衛術を学ぶ事になった。銃とか撃ったことないと言ったら鼻で笑われた。

とてつもなく厳しい訓練の末、俺は何とか銃の撃ち方や当て方、人の気絶させ方、首の折り方、主に一撃必殺の方法を学んだ。ただ、長距離射撃や爆発物の使い方（主にC4）を学ぶ必要があったのかは謎だ。

最終的にはSPはにやりと笑って免許皆伝だといっていた。唯一、嬉しかった事は、その鍛えられかたのせいでダイエットに成功した事だ。JKの呪はさすがに死亡フラグマシンのSPに敵わなかったようだ。

これで、ぼっちゃり系じゃないぞ。

そんな、ある日、俺が紅茶と半分欠けたチーズケーキを横に置き、小説（盗作）を書いていたところ、後ろにあきらかにSPではない気配がしたので机の下に備え付けてある銃を引き抜き、自然な動作

で右に回転しながら銃を構えた。

「何者だ」

「はて、君はもう少し体が大きかったと思うが」
パンツ

銃声が響いた。俺が威嚇射撃をしたのだ。

「答えろ、お前は誰だ」

「ホグワーツ校長、アルバス・ダンブルドアという。君の義理の兄弟の先生じゃな」

「・・・証拠は？」

「証明は難しいの、君はマグルじゃから」

「ハリーが2年生の時の校長室の合言葉は？」

「レモンキャンディーじゃ」

「ハリーが一年生になるまで食べられなかったお菓子は？」

「バーティーボッツの百味ビーンズじゃよ」

ハリーが話していた内容と一緒にだから、恐らくアルバス・ダンブルドアに間違いないと思った。

「それで、マグルの俺になんのようですか？校長先生」

「君の本来のしゃべり方に戻してくれても構わんぞ」

「俺の喋り方をどうして知っている？」

「わしは、ちと耳が広くての」

「あなたの耳が変わる人が僕の近くにいるということか」

「うむ、噂通りすごぶる頭が切れるの」

「それで、用件は何です？」

「君にマグル学の教授に就任してもらいたい」

「・・・前任の先生は？」

「死亡フラグだとかよくわからない理由で退任したが」

「同じ理由でお断りする」

「ふむ、マグルの中では常用語かの。わしもマグル学が専門ではないからよく知らぬが。時に聞くが、君はハリーを溺愛していると聞く。ハリーを身近に起きたいとは思わんのかね」

「俺はハリーを影から支えられれば良いと思っている」

「ふむ、君はハリーに危機が迫っていると思っているようじゃの」

「当たり前でしょう。生き残った男の子なんですから」

「ハリーがかの？」

不思議そうな表情を浮かべるダンブルドアに嫌な予感がした。

「ハリーはヴォルデモートを倒したのではないのですか？」

「それは、ネビル・ロングボトム的事ではないかの」

「嘘だ!!!」

俺はそう言つと気絶した。

俺はその日、雛見沢症候群を発病したのだつた。

ハリー・ポッター・・・じゃないだと！（後書き）

「ハリー・ポッターと」ではなく「ネビル・ロングボトムと」
そんな話でした。

JKの呪なんてダドリーの妄想でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342z/>

介入者はモブばかり

2011年12月19日17時49分発行